

これこそ日本文化の大陸進展の一つの大きなものではあるまいか。吾々アマチュア仲間の東亞協同體へ、興亞への一つの御奉公として、この問題を御考へ願ひたいと思ふ。(2600—8—20)

編輯局より

本號には E. C. スライフ博士の火星面の研究の全譯を載せることが出来たのは本懐である。之れは米國から贈られた Los Angeles Examiner といふ新聞の特ダネ記事であつて、其の要點は、去る七月10日頃の本會急報や、同盟通信により、又、おくれて、科學畫報の九月號によつて我が國の一般社會に知らされた通りである。尙ほ、又、七月12日の本會神戸支部例會席上で山本會長が其の原文を紹介された。こゝに載せたものは、原文の全譯で、米國式のジャーナリズムの香りが多分にある。(急報にも知らせた如く、このスライフ氏の發表した火星寫眞の増刷りを、別に希望者には頒ちますから、希望者は本會事務局まで申込んで下さい。郵送料とも、實費1圓也です。)

木邊成麿氏の白鳥座 SS 型の變星論は、前號からの續きで、尙ほ一二回連續するが、此の種の星の觀測や研究は、氏の最も得意とされる所で、學術的に、最も讀みごたへのあるものである。

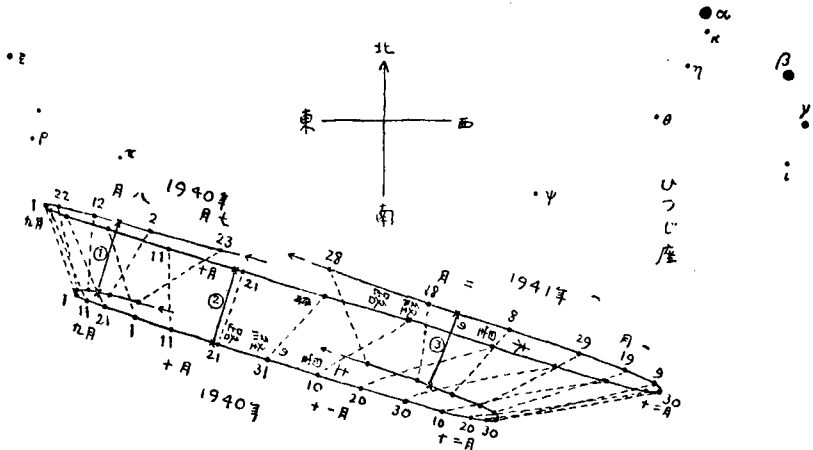
S. I. 氏の古代日本曆の研究も、木邊氏のに劣らぬ深い研究の發表で、既に7回を重ねてゐるが、今後尙ほ數回續載される豫定である。我が國の古代文化研究の資料として、貴重なものであると共に、讀者の研究心に多くの示唆を與へるものと言つて宜からう。

大阪商科大學長河田法學博士の文は、他からの轉載で、人々の立場々々による多方面からの言ひ分はあらうが、之れについては主筆の寸評が卷頭に載つてゐるから、こゝに多くを語らない。

タテ組附録の“コロンブスの天文學”は、今から四五百年前の、“コペルニク以前”の歐洲天文學界の一面を伺ひ得られる名文である。資料はドイツのチンナ博士の研究論文に獲たもので、貴重な一文献である。之れも數ヶ月前の神戸の例會で主筆が朗讀紹介されたものである。

觀測部月報報告へ筆を向けるが、此の頃、最も健實なのは、只、流星課だけで、他は太陽でも、黃道光でも、觀測報告が振はない。之れには、人的關係だけでなしに、天空異變の影響も多分にあるが、それにしても、五六年前の盛況に比べて、太陽黑點觀測報告に缺測の多いことは惱みのたねである。部長や課長の指導宜しきを得て、何とか現状から立ち上つて貰ひたい。太陽黑點の活動は確かに極大期を過ぎたけれど、しかし、黑點の學的價値は、(第323頁へ)

く，時期も不便で，決して今回のやうな美しさは味はれない。



今回の兩星接近は，高度が高く，殆んど頭上に近く，時機が秋で，兩星が共に太陽の反対側にある時であるから，萬事好都合である。兩星の最も近づく日は前後3回もあることも，吾々には愉快な消息である。

この頃の日體曆では，星が互に會合すると言つても，それは“赤經會合”を言ふ場合が多いけれど，實際の現象を眼で見る感じから言へば，“黃經會合”が本統の“會合”である。因みに，今回の兩星の會合について，比較して見ると，

	赤經會合	相互の距離	黃經會合	相互の距離
第 1 回	1940年 8月 15日	1° 15'	1940年 8月 8日	1° 10'
第 2 回	1940年 10月 12日	1 17	1940年 10月 20日	1 15
第 3 回	1941年 2月 21日	1 21	1941年 2月 15日	1 15

この次ぎに，このやうな立派な接近が見えるのは，60年後の，學曆2000年でなければならない。青年たちの中で，氣の長い人々は此の年を御待ちなさい。

(1940-8-1)

(第 352 頁より) 極大期でも，極小期でも，變りは無いのであるから。

いよ々々本誌の次號はダブル・ナンバ(倍大號)で，“十，十一，十二月號”とし，天象は十一月と十二月と兩月の空の豫報を紹介し，一般の記事についても例によつて，主筆の卷頭隨筆のほかに，木邊氏や，S. I. 氏の續稿と共に，山本氏の“保井春海の星座”や，フィッソ博士の“極光を語る”，フロイントリヒ博士の“球狀星團”の新論，“プラネタリウム通信”等々，本誌の誇るべき記事として載せることとする。

(1940-8-20)